

東北方言音声の研究

著者	大橋 純一
号	69
発行年	1998
URL	http://hdl.handle.net/10097/14310

おお はし じゅん いち
大 橋 純 一

学位の種類 博士(文学)

学位記番号 文博第69号

学位授与年月日 平成11年3月25日

学位授与の要件 学位規則第4条第1項該当

研究科・専攻 東北大学大学院文学研究科(博士課程後期3年の課程)
日本語学専攻

学位論文題目 東北方言音声の研究

論文審査委員 (主査)
教授 村上雅孝 教授 齋藤倫明
教授 平野日出征
助教授 小林 隆

論文内容の要旨

一、東北方言の特性と本研究の目的

東北方言は、「東北訛り」「ズーズー弁」等のことばに代表されるように、方言の特性が、音声事象の特異性をもって言い表される場合が多い。現に、その実相は、日本語の方言音声全般に照らし合わせてみても、とりわけ特徴的である。

また、単に特徴的であるばかりではなく、当方言の特に山岳辺境地域等に聞かれる音声は、時に、古音残存の姿を示唆するものでもあり、史的追究の観点からも、見逃しがたい大きな特徴を有している。

以上のように、東北方言の各特性を改めて整理し直してみると、当方言の方言らしさを形成している一側面は、感覚的にも、本質的にも、音声事象面であるということがよくわかる。とするならば、当方言を追究することの意義や可能性の一側面も、当然のことながら、この音声事象面に見出されるべきものと考えられるのである。

本研究では、以上のような認識のもとに、東北方言音声の中の、特に特徴ある事象について、

次の諸項を明らかにすることを目的とする。

a. 東北諸方言の音声

イ. 発音実相とその各実相の発音（形成）原理

ロ. その地理的状況の実際

ハ. その年代的状況の実際

ニ. その地理的・年代的状況の意味（それに即した各音声事象の通時的展開）

b. 東北特定方言の音声

イ. 特定方言音声（古音）の現在状況

ロ. その通時的展開

二、本研究の方法

1. アプローチの視点

上記の目的のために、以下の二側面からの調査追究を行う。

(1) 東北諸方言の音声についての方言地理学的な調査追究

(2) 東北（北奥・南奥）各拠点方言の音声についての微視的・ボーリング的な調査追究

前者においては、東北及び隣接の7県、46地点を対象とし、男女3世代の音声状況とその相関について、地理学的に追究しようとする。

後者においては、先行の方言区画（北奥方言・南奥方言）に従い、北奥・南奥の各拠点方言（代表1地点）をとりたてて対象とし、各々の音声状況について、各年代、男女多人数にわたって、微視的・ボーリング的に追究しようとする。

また、その両者をつき合わせることにより、それぞれの視点が行き及ばない点を相互に補おうとする。

2. 分析の視点

従来、方言音声の分析に際しては、主には、研究者の聴覚的な聞こえがよりどころとされてきた。確かに、言語音の分析であり、人間の耳にどう聞こえるかということは、分析上、極めて重要な視点となる。また、各個人の1回ごとの発音（音声）は、厳密には全て異なるのであり、その意味においても、聴覚として感知しうる範囲での音声の把握ということが、マイクロなレベルでの分析以上に実質的な意味を持ってくることもある。

とは言え、一方で、“聞こえ”とは主観的なものである。能力の問題であると言ってもよい。したがって、特に中舌母音や子音の清濁（その度合い）など、共通語音とは異なる微妙で中間的な方言音声を論議するにあたっては、客観性の保証が十分には得がたいという問題を抱えた中で、音の存否や変化の是非が種々に論じられかねないという危険性が、常にそこには存在し

てきたように思う。

その意味で、聴覚中心であったこれまでの方言音声の把握とその成果を、同時に音響学的な見地からもとらえ、検証していく方向性というものが、今後、さらに強く要請されてくるのではないだろうか。それは、既述の客観性という問題に照らし合わせてみても、とりわけ重要なことであるように思われる。

本論では、各発音の実相と性質を、まずは音響分析図として客観的に示し、それに聴覚的な聞こえを照らし合わせながら、方言音声の現在状況を整理していく。それが、本研究における分析の視点であり、特徴の一つということになる。

三、調査の概要

1. 調査地点

「二-1. アプローチの視点」に記したとおりである。

2. 対象話者

次の話者を対象とする。

(1) 東北諸方言

70歳前後（老年層）、40歳前後（中年層）、15歳前後（少年層）男女各1名、計6名

(2) 東北（北奥・南奥）各拠点方言

① 青森県北津軽郡金木町（北奥拠点方言）

80～10歳代の男女、計56名

② 宮城県亶理郡山元町（南奥拠点方言）

80～10歳代の男女、計55名

3. 調査項目

(1) 音韻（発音）調査

(2) アクセント調査

の二種類に分かれるが、本論では、そのうちの「(1)音韻（発音）調査」の結果を取り上げる。

音韻（発音）調査は、計106項目（ただし、それは全地点共通調査のものに限る）。調査は、いわゆる謎々式の質問調査によった。ただし、当調査の場合、1項目から種々の側面を読みとろうとする意図があるため、項目数としては106であるが、実質的な視点としてはその限りではない（ex.「江戸」→第一音節/e/の音声、第二音節/do/の音声）。

4. 調査年月日

予備的・補足的な調査も含め、1995年10月25日～1998年9月15日にかけて調査した。

四、本論の構成大要

第一章 母音

第一節 単母音 /i//e/

第二節 子音後接母音 - /si//su/ の問題を中心に

第三節 連母音

第四節 オ段長音開合現象

第二章 子音

第一節 語中・尾無声子音の有声化

第二節 語中・尾無声子音の半有声化

第三節 語中・尾有声子音の鼻音化

第四節 /ki/ の破擦音化

第三章 拍

第一節 特殊音の持続時間

第二節 特殊音の持続時間と語中・尾無声子音有声化現象との相関

第三節 特殊音の持続時間と連母音融合原理との相関

五、本論各章節の内容

第一章 母音

第一節 単母音 /i//e/

/i//e/ 発音全地点の音響分析を行い、その音声状況を分類。それらの地理的・年代的状況とその意味とを追究した。

第二節 子音後接母音 - /si//su/ の問題を中心として

単音節語と多音節語とにおける /si//su/ 発音について、その音声状況を分析。単音節語のそれについては、地理的状況について、従来の報告と筆者の調査結果とを比較。その相違点について追究すると共に、筆者調査の中・少年層への展開と動向を明らかにした。多音節語については、音環境による発音の相違を究明した。

第三節 連母音

連母音の発音実相を全地点について音響分析し、分類。その地理的・年代的状況を明らかにすると共に、その融合原理を母音干渉の視点から究明。その原理が老～中年層には働くが、少年層においては別原理が働くことを明らかにした。

第四節 オ段長音開合現象

オ段長音開合現象の痕跡的状況を、山形県東田川郡大鳥方言に即して検討。当現象の残

存・衰微の経過傾向を、語彙の新旧や年代差等、語性的・位相的側面から追究した。

第二章 子音

第一節 語中・尾無声子音の有声化

語中・尾／k／／t／子音の有声化・非有声化の原理を、その前後接音との関係から、一般語・複合語・連文節形について究明した。

第二節 語中・尾無声子音の半有声化

上節の有声化の実相をさらに細密に観察すると、有声化の有無をにわかには判定しがたい、中間的発音がみとめられる。それを「半有声化」と称し、それとして追究。その音響的特徴を明らかにすると共に、その出現が、質問調査の場面におき、50～30歳代という過渡的年代に現れる音声的に有意な現象であること、さらに、それが自然談話では有声化して現れることを解明した。

第三節 語中・尾有声子音の鼻音化

当域方言の特徴である／ŋ／／d／／z／／b／濁音直前鼻音介生現象について、各濁音直前の鼻音実相を音響的に究明。その地理的・年代的状況を明らかにすると共に、鼻音化の調音原理と当地域鼻音化現象との関連を究明した。

第四節 /ki/の破擦音化

／ki／が〔ksi〕のように破擦音化して二重調音される現象について、音響学的にその音相を解明。その地理的・年代的状況を明らかにすると共に、そのような発音の生成は、実は、後接母音／i／の中舌性に規定されているものであることを明らかにした。

第三章 拍

第一節 特殊音の持続時間

特殊音／R／／Q／／N／の持続時間を、拠点方言、宮城県山元町の多人数について計測。／R／の場合は当方言一拍分の長さより短くなるが、／Q／／N／の場合はならないことを解明。さらにそれら各々の地理的状況を究明した。この事実究明により、従来の「特殊音一括短縮—シラビーム方言」という常識は、「／R／のみ短縮—それのみがシラビーム方言」と訂正されねばならないことになる。

第二節 特殊音の持続時間と語中・尾無声子音有声化現象との相関

一般に、特殊音／R／／Q／／N／に後接する／k／／t／は有声化しない。しかるに、／R／が上節のように短縮化し、長音としての本来的性格を失うことになった。そのことが、／k／／t／の有声化にどう関わるかを音響分析により検討。それ（短縮化）が／R／のみを有声化させる要因となって働いていることを明らかにした。

第三節 特殊音の持続時間と連母音の融合原理との相関

特殊音／R／が短縮化するシラビーム性は、／akeR／（赤い）などの連母音の融合結果音としての長呼部に対してはどう作用するのかを、拠点方言の老・少年層を中心に音響的に計測し明らかにすると共に、その結果に基づき、老・少各々の連母音融合原理との相互規定関係についても究明した。

六、本研究の成果と意義

本研究は、日本語方言の中でも特別に複雑多彩な現象を呈する東北方言音声について、その実態と現象の理を、

- イ．拠点方言に即しての微視的見地
- ロ．多地点方言にわたっての巨視的見地
- ハ．多人数・多年層にわたっての年代的見地

から、

- a．聴覚的手法
- b．音響学的手法

によって追究したものである。

本研究は、このように、微視・巨視相まち、共時・通時両面から、立体的・多面的に、さらには音響学的に究明がなされている点に特徴と意義がある。

ここに、以下、本論文の到達点とその意義をまとめれば、次のようになる。

まず大きく、地理的・年代的な面から見れば、以下の点が特筆される。

- ① 地理的には、東北北西部と南東部との対立が、ほぼ全要素にわたってみとめられ、かつ、その変化も、おおよそ後者（南東部）が先行、そこでの新興勢力が徐々に前者（北西部）を駆逐するという形で進展していく。
- ② 年代的には、“老→中→少”の変化序列が極明瞭であり、また、そのうちの特に中～少年層にかけての急速な変化動向により、事態は、多くの場合において、一律・画一化の状況へと収束されていく（ただし、その画一化の動きにも、時に、「①」的な、北西部と南東部による遅速関係がみとめられる）。
- ③ その“南東部から北西部へ”という地理的な横の動きと、“老～少年層へ”という年代的な縦の動きとは、おおむね呼応するものであり、その両者が立体的に一体となって、当方言の音声事象（その現在状況）を形成している。

以上は、いずれも、東北方言音声の動態とその方向性を示すものであり、特に①・②よりうかがえる変化序列の事態は、大きくは、方言区画や圏論の問題にも関わってくる重要な究明点であると言える。

他方、以上の総体的な成果を踏まえ、さらにそれを要素別に見るならば、以下の点が特筆される。

- ① 単母音 (/i//e/)・子音後接母音 (/si//su/) の混同・中舌化現象、語中・尾子音の半有声化現象、連母音の干渉・融合化現象等に、白黒によってでは割り切れない、いわゆる中間相の存在をみとめ、その実相と性質を音響学的な見地から明らかにすると共に、その生成や実現の理を、調音構造の生理的な側面、当人の音意識の側面、さらには史的背景等の通時的側面から総合的に検討し、明らかにしたこと。

— 従来は、そのような現象の存否いずれか一方のみに注意が向けられてきがちであった。それを、このように中間相をそれとして対象化し、各々を相関の相として現象をとらえなおしてることにより、従来見えていなかった変化の通時的・過渡的側面が明らかになった。これは、従来の研究の盲点を補う新たな知見の付加であるという点で、成果と意義があると考えられる。

- ② /k//t/子音の有声化、/k/子音の破擦音化等、子音部に生じる方言音声事象を、むしろ付接母音の広狭、ないしはそれの中舌性の観点から検討を行い、その現象の理を多角的・相互関連的に明らかにしたこと。

— 従来は、子音は子音の現象として見るにとどまる場合が多く、付接母音の調音や実相がそれを規定するという見地からの分析が乏しかった。筆者においては、特にこのような視点から現象を見ることにより、その方面の知見を従来の研究に新たに付け加えうることになった。

- ③ 特に拍(時間)という側面に着目し、東北方言音声のシラビーム性をより分析的に、より客観的に検証し、明らかにしたこと。

- ③-1 その持続時間の実際を、音響値に基づいて比較・検討することにより、特殊音間に、

/R/ (シラビーム) ↔ /Q//N/ (モーラ)

のような差異の存することを明らかにしたこと。

- ③-2 それに基づき、東北地方域におけるシラビーム方言、モーラ方言各分布域を大局的に明らかにしたこと。

- ③-3 以上を、単に拍(時間)それ自体の問題にとどめず、さらにその他の音声現象(— 有声化現象、連母音融合化現象)との関わりを見ることにより、当シラビーム現象の方言音声全体の中で果たしうる機能性や意義を、有機的・発展的に明らかにしたこと。

— 従来、東北方言のシラビーム性については、/R//Q//N/が特殊音として一括

的に論じられてきた。それを、音響学的手法により客観的かつ厳密に時間測定し、比較検討した結果、上記「③-1」～「③-3」の結論を得た。そのいずれもが、新視点の提示、及びその視点からの新見の付加という成果と意義を有するものであると考えられる。

④ 山形県東田川郡大鳥方言におけるオ段長音開合現象の痕跡的状况について、歴史的開音系語、合音系語各々について、老中・男女、多人数にわたり、明らかにしたこと。

— 今や、オ段長音の開合現象は、当方言の場合、いよいよ末期的状況に至っている。その意味において、先行の調査を補い、それをさらに徹底したことは、最低、実態の定着記録という点で、成果と意義を有するものと考えられる。これに基づき、以後、文献国語史上の諸事実との比較や中世から現代への通時的流れの跡づけ、他方言との比較対照などがある程度可能となろう。さらには、その残存・衰微の経過傾向や理法をある程度究明しえた点は、言語変化の理を考えるための、1つの知見の提供にもなるかもしれない。

以上のようなのである。

いずれの要素を見る場合にも、まずは実態（聴覚的・音響学的実態）を精確に把握し、その究明のための然るべき分析法を見きわめ、追究を行ったつもりである。それにより、従来の究明事項をさらに発展的に補う点、従来の研究では視点・分析の行き及ばなかった点等が、上記の諸項のように明らかとなった。それが、当論文の現段階における到達点であると共に、ここになしえた本研究の成果、意義である。

七、本研究の今後の課題・展望

今後、さらに補足的・発展的に追究すべき課題は、各章節にわたり、数多い。その各々について考究を深め、本論で得た知見をさらに発展・展開させるならば、本研究は、それへの大きな礎となるであろう。

中でも、/si/ /su/の実態に見出された分布境界域の北上化傾向等、特に境界接触地域の音声事象に関しては、興味やそれに伴う課題も多く、地点・話者をさらに充実させた形での調査・追究が肝要である。

また、本研究では、各章節の目的に応じ、調査しえた範囲の資料を生かすべく、追究を行ったが、音響分析上の制約もあり、特に女子の実態については、十分に反映させて論じることができなかった部分が多い。その分析・討究の一層の徹底も一つの課題となる。それはまた、位相差や個人差等、社会言語学的な研究課題にもつながっていく大きな課題でもある。

論文審査結果の要旨

本研究は、日本語方言の中でも共通語との違いが著しく、また複雑な様相を示す東北方言の音声について、その実態を全般的に解明しようとしたものである。論の全体は言語要素ごとに、第1章「母音」、第2章「子音」、第3章「拍」というように3章に分けて構成され、それぞれ東北方言に特徴的な現象が取り上げられている。

まず、第1章「母音」の第1節「単母音 /i/ /e/」では、東北方言において統合傾向が認められる母音イ・エについて、調査結果の音響分析を行うことでその音声を客観的に把握し、かつ、明らかになった特徴が地理的・年代的に見てどのような状況にあるかを検討している。また、第2節「子音後接母音 - /si/ /su/ の問題を中心として」では、やはり当地域で混同されやすいシ・スの発音について、第1節と同じ手法で、音声の客観的な把握と、地理的・年代的な状況の検討を行っている。さらに、第3節「連母音」では、アイ・アエなどの連母音の発音実相をやはり音響分析し、かつ、地理的・年代的状況を明らかにするとともに、その融合原理を母音相互の干渉という視点から究明しようとしている。

次に、第2章「子音」の第1節「語中・尾無声子音の有声化」においては、語中語尾カ行・タ行子音の有声化・非有声化の原理を、その前接・後接音との関係から、一般語・複合語・連文節形について考察している。また、第2節「語・中尾無声子音の半有声化」では、第1節の有声化の実相をさらに細密に観察することにより、有声化の有無をにわかには判定しがたい中間的発音、すなわち「半有声化」を認める。そして、その音響的特徴を明らかにするとともに、その出現が年代的に中年層という過渡的年代に現れる音声であることを明らかにしている。続く第3節「語中・尾有声子音の鼻音化」では、ガ行鼻音のほか、東北方言の特徴であるダ行・ザ行・バ行子音の鼻音化現象について、各子音直前の鼻音実相を音響的に観察し、その地理的・年代的状況を明らかにするとともに、鼻音化の調音原理との関連を考察している。さらに、第4節「 /ki/ の破擦音化」においては、キが [ksi] のように破擦音化して二重調音される現象について、音響学的にその音相を分析し、かつ地理的・年代的状況を明らかにすると同時に、そのような発音の生成が後接母音イの中舌性に起因すものであることを検討している。

最後に、第3章「拍」の第1節「特殊音の持続時間」においては、長音・促音・撥音の持続時間を、拠点方言である宮城県山元町の多人数について計測し、長音の場合は当方言の一般的な拍の1拍分の長さより短くなるが、促音・撥音の場合にはそのようにならないことを明らかにし、それらの地理的状況の違いに論を及ぼしている。ここでは、当方言のシラビーム方言的特徴が特殊音のすべてに当てはまるという常識に反省を加え、そのような特徴は長音においてのみ顕著で、促音・撥音には強く認められないという見方を新たに提示している。また、第2

節「特殊音の持続時間と語中・尾無声子音有声化現象との相関」では、一般に、長音・促音・撥音に後接するカ行子音・タ行子音は有声化しないと言われていることに対して、第1節で見たように長音のみが短縮化し本来的な性格を失うことにより、カ行子音・タ行子音の有声化を引き起こすが、短縮化の起こらない促音・撥音については、そのようになっていないことを明らかにしている。さらに、第3節「特殊音の持続時間と連母音の融合原理との相関」においては、長音が短縮化するシラビーム性が、アケー（赤い）など連母音の融合音としての長呼部に対してどう作用するのかを、拠点方言の老・少年層を中心に音響的に計測するとともに、その結果に基づき、老・少それぞれの連母音融合原理との関係についても検討している。

以上、本論文の内容について概観したが、調査や分析の方法、得られた結論の中で、次のような点は十分評価できるものである。

まず、イ・エ・シ・スの統合現象、語中・語尾子音の有声化現象、連母音の融合化現象などに、明確に割り切ることのできない中間相の存在を認め、その実相を音響学的方法で詳しく観察したことが注目される。従来、そのような現象は、存否いずれか一方のみに注意が向けられがちであったが、中間相に焦点を当てて詳細に観察することにより、これまで見えてこなかった変化の過渡的側面が浮き彫りになったのは、従来の研究を補う新たな知見と言ってよい。

次に、これまで一律に把握されがちだった音声事象について、個々の音声ごとの詳細な検討により、対象によって異なった傾向を示しうることを指摘した点が評価される。例えば、拍の問題を取り上げた第三章はその代表であり、東北方言がシラビーム方言であると言っても、長音の場合と、促音・撥音の場合とでは、明らかに傾向が異なることを示している。この点は、子音の有声化現象や連母音融合化現象への影響の問題にも発展するなど、論の広がりを見せている。

さらに、この論文では、東北地方の全域について調査結果を示しており、従来漠然ととらえられてきた音声現象の分析が、統一的な調査で明確に把握されたことの意義が大きい。また、そのような地理的な広がりのみでなく、老年層・中年層・若年層の3世代に及ぶ調査が実施されたことにより、現代における変化の動向についても視野に収められている点が新しい。

本論文には、歴史的な考察の深化などの課題も残されているが、そのような課題は、本論文を土台にして発展させるテーマであり、今後の研究に十分期待できるものである。むしろ、この論文は、これまで個々ばらばらにしか把握されてこなかった東北方言の音声について、対象とする音声項目を広く網羅しながらこの地方の全域に及ぶ実態を解明し、また、3世代にわたる年代差まで明らかにしたという、その総合性を評価すべきである。しかもその調査が個人の力により、短期間に統一的な方法で実施されたのも驚嘆に値する。東北方言の音声をそのような全体的な立場から把握した研究はこれまでになく、今後のこの分野の基礎的な研究となる

ことはまちがいない。

よって、本論文の提出者は、博士（文学）の学位を授与されるに十分な資格を有するものと認められる。